Welcome to らいぶらりー

カウンターでのひとりごと Part 2

大学図書館でサービス部門を担当する職員の方の中には、英語ペラペラの人もいらっしゃるでしょう。でも喋れない、英語で話しかけられるとドキッとしてしまう、という人の方が圧倒的に多い・・・ですよね。

最近外国人の留学生や教官がふえました。彼ら彼女らはとても熱心に来館しては「あれはどこだ？」「これはどうしたらいいか？」と聞いてきます。たまにわかる単語の意味から「おそらくこうであろう」と想像し、知っている単語を駆使して説明するのですが、さすがに単語だけでは限界があり、英会話教室通いでも・・と真剣に思い始めていた頃、館内で英語研修をしてもらえることになりました。

受講生はカウンター担当者６名を含む９名。講師は某学部の英語・日本語・中国語ＯＫというバイリンガルＣ先生です。

第１回目「I want a new library card.」
「まずは英語で自己紹介を」「えぇー、うそー！」
自分の係名とか仕事の内容って英語で言えますか？

第２回目「Where can I find this book?」
「日本語は使わず、英語だけでがんばりましょう」という先生の言葉に「ぎゃー」という悲鳴が聞こえます。具体的な配架場所って日本語でも説明しにくい時があります。どうしても説明できない時は右手を上げて「Over there」。でもこれでわかるかな？

第３回目「Can I borrow this book?」
丁寧な言い方にするために、やたらと「Please」や「I'm sorry」や「Excuse me」をつけるとよろしいらしい。ふむふむ、なるほど。

第４回目「Where can I photocopy?」
いよいよ仕上げ。「２人組になってフリートーキングしましょうか」「えぇー、そんなぁー」成長の跡が見られるような見られないような私達。「大学図書館の職員なのに、なんちゅーレベルの低い人たち」と先生は思ったかも。

ほんの一部ですが、今まで「これで正しいのかなぁ？」と不安に思いながら使っていた言葉も、自信を持って言えるようになりました。（話す以前の問題としてヒアリングができていないというのはこの際置いといて）『図書館職員英会話文例集』を作らねば・・などというでっかい夢は夢で終わりそうで...
日を追うごとに忘れていっているような気がします。あぁこれではんではすっかり忘れてしまう前に、せっかくですから少し披露しまないか。しょう。あなたは忘れないでくださいね。

Please fill out this form. （この用紙に記入してください）
It will take about 2 or 3 days. [2 weeks] （２,３日[２週間]くらいかかるでしょう）
Let me check. [所蔵しているか？という質問に対して]（検索してみましょう）
I'm sorry. This book is out of loan. （すみません、貸出中になっています）
This journal is at the binder's. （この雑誌は製本されています）
How would you like to pay for the copy, with your office budget or by yourself?
（コピーは公費ですか私費ですか？）

こんなのとっくに知っている？・・ですよねー。人間死ぬまで勉強だっちゅーの。

＜**A Z U**＞

拾い読み『十二類絵巻』その①　～猿に烏帽子～

法文学部教授　言語文化　下房　俊一

『十二類絵巻』は、室町時代前期、1438年から1449年の間に成立したと思われる、御伽草子系の絵巻で、十二支の動物たちと狸・狐・鵜・梟などの鳥獣との合戦譚をその内容とする。十種ほどの伝本が知られているが、そのうち最善本と目される、『新修日本繪巻物全集１８』所収の旧堂本家本によって、気のついたことをいくつか、順次述べてみようと思う。

◊　◊

物語は、十二支の動物たちが歌合を催す場面から始まるが、ここで、猿が烏帽子を被っている姿が、まず目につく。動物たちは擬人化されて、みな人間の衣裳を付けているのであるから、その限りで、これは何の不思議もない。室町時代の終わりころまで、一部の階層を除いて、成人男子はほとんど例外なく烏帽子を付けていたのであるから、そのことからすれば、他の動物たちが烏帽子を被っていないことの方が、むしろ問題であるかもしれない。が、今それはさしおいて、なぜことさら猿が烏帽子姿なのかを考えてみたい。

実は、「猿に烏帽子」という諺の類があった。『日本国語大辞典』の「猿に烏帽子」の項は、

（猿に烏帽子をかぶせるの意から）人柄にふさわしくないのたとえ。内容と外観とが一致していないこと。

と説明し、同じく「猿の烏帽子」の項は、

「猿に烏帽子」に同じ。

として、

きゃつに似合はぬ礼儀の詞、猿の烏帽子、狼の十徳

という、近松の浄瑠璃「関八州繋馬（かんはつしゅうつなぎうま）」（1724）の用例を引く。

また、『諺語大成』によれば、『漢語大和故事』（1691）、『訓蒙故事要言』（1694）、『諺草』（1701）、『和漢古諺』（1706）、『世話類聚』（1730以前）などの辞書類に、「猿に烏帽子」の成語が見えることを知りうる。

しかし、ここで問題なのは、これらの用例の時代が、『十二類絵巻』の成立から二百年以上も遅れることである。

『時代別国語大辞典』の「猿に烏帽子を着せたやう」の項に、ようやく、

短気ですぐかっかと顔を赤くして怒る人を、人のなりをした猿のようだと嘲っていう語。

として、

今モ人ノ短気デ、モノニコラヘヌヲバ、猿ニヨボシヲキセタヤウナト云ホドニ

という、『漢書列伝景徐抄』（1477～1515）の用例を見出すことができる。もっとも、この用例も『十二類絵巻』とはなお数十年の開きがある。１５世紀後半の用例が見出せれば一番よいのであるが、今のところ管見に入らない。

とはいえ、同抄の用例から、『十二類絵巻』の時代に、すでに「猿に烏帽子」の成語があったと見ることは、それほど不自然ではなかろう。そうして、この絵巻の絵がその成語を念頭において描かれたと解すれば、まことによく納得が行く。

この推測が妥当だとすれば、逆に、この絵こそが「猿に烏帽子」のもっとも古い”用例”だ、ということになる。たとえば、猿が烏帽子をつけた『十二類絵巻』の絵、それを”用例”として載せた、そういう国語辞典があったらおもしろかろう、と考えている。

（しもふさ　としかず）

編　集　後　記

本号では、「松風」第54号／「歴史学特集 PART　1：日本中世・近代、東洋編」の続編として、「日本先史・古代、西洋史」関係の専門分野と資料・図書館との関わり、研究分野紹介などを特集としました。執筆者の方々も本学のほか、関連学外諸機関からも多忙中、多大な協力を得ることができ、感謝いたします。この特集が情報&ネットワーク形成の契機になればと思います。（S.K.記）

島根大学附属図書館報「**松風**」第５８号
平成１１年３月発行
発行　島根大学附属図書館報編集委員会
住所　〒690-8504　松江市西川津町1060
電話　0852-32-6083
FAX　0852-32-6089　0852-32-2781（ILL）

[表紙写真：落合輝満専門員]

お 詫 び

松風第57号の教育学部助教授 西田忠男氏の記事について、編集者側の不注意で掲載記事の中にミスがありました。図書館ホームページで正規版を掲載しています。訂正してお詫びいたします。